

平成 26 年 6 月 30 日現在

機関番号：64401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22720337

研究課題名(和文) 実業家・富田儀作の高麗青磁復興事業を事例とした植民地のエージェントの人類学的研究

研究課題名(英文) Entrepreneur Gisaku Tomita and His Korean Celadon Revival Project: An Anthropological Case Study of Colonial Agents

研究代表者

太田 心平 (OTA, Shimpei)

国立民族学博物館・民族社会研究部・准教授

研究者番号：40469622

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円、(間接経費) 870,000円

研究成果の概要(和文)：植民地期朝鮮における日本人の知識人層、特に先行研究が着目してきたエージェント(行政官や宗教家、商人や軍人、そして研究者)以外の人びとが、韓国・朝鮮の伝統の創造と、いかに関係していたかについて、人類学的な事例研究をおこなった。その成果として、(1)実業家、物書き、名士などという人びとの活動が、(2)この時期に出現した近代メディア(雑誌、講演会、サロンなど)により、たがいに媒介されて広がりをもせ、(3)先行研究が着目してきたような他の植民地主義のエージェントとも相互に関連、作用して、全体的な植民地主義的エージェントを発揮していたことが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：This research was an anthropological case study about the invention of tradition by the Japanese intellectuals in colonial Korea, especially by those besides bureaucrats, priests, merchants, military officers and researchers that previous research has focused on. As results, it proved (1) the activities by those who were known as entrepreneurs, writers, personages (2) spread over and got connected to each other by the newly emerged modern media such as journals, lectures, salons and so on, (3) to reflect and interact with the other colonialist agents that previous research often mentioned, which constructed total colonialist agency.

研究分野：人文学C

科研費の分科・細目：文化人類学・民族学

キーワード：植民地主義 エージェント 近代エリート 工芸 歴史人類学

1. 研究開始当初の背景

近年の日韓関係では、文化交流が活発化するとともに、過去の再考がますます求められている。特に、植民地朝鮮で工芸の振興に寄与した日本人への社会的関心は高まり、すでに有名な柳宗悦の他にも関心の幅が広がった。例えば、平成 21 年度にも朝鮮陶芸評論家の浅川伯教・巧兄弟に関する展覧会や映画『白磁の人』が市民からの強い関心を得た。学術的知見を望む声も増している。

これまで報告者は、現代の韓国社会に残る植民地期の影響を文化的問題として解明し、平成 16～17 年度および平成 20～21 年度にはそれぞれ特別研究員奨励費(課題番号 16・7704)および若手研究(スタートアップ)(課題番号 20820069)の研究助成を受けて、韓国・朝鮮の伝統の創造(真正な文化の整理と認定)がどのように行われてきたのかを論じてきた。その過程で明らかになったのは、既存の人類学的植民地研究で特に重要な精査対象とされてきた人びと(政治家/軍人・宗教者・経済人)だけでなく、そこに集約されない人びとや、それらの陰に隠れた人びとの行為にも重要な意味があるということだった。

人間の行為には、社会が置かれた時局的な条件に沿って意図せざる結果が附随し、それが時局に反作用するという循環が見られる。そうした行為や行為者が「エージェンシー/エージェント」と呼ばれるが、近年このエージェンシーの意図しなさの多様な再考が叫ばれはじめています。申請者も、一つの行為に多様な意図を込めた人物が、いずれの意図からも外れた形で時局に影響したという諸事例 いわば「多面的エージェント」を植民地朝鮮に再発見し、既存の知見を修正してきた。例えば、研究者や在野の「物書き」が果たした支配や戦争のエージェンシーを解明し、総督府の政策というマクロな動きと村落の住民の変化というミクロな動きとのあい

だに、中央官僚を輩出する家門というマクロとミクロを結ぶエージェントを再発見し、植民統治のメカニズムを解明する一助とした。

他方で申請者は、単一の活動意図をもつと思われがちな組織体を注視し、組織内には人びとの多様な意図が錯綜するが、むしろだからこそ組織が多面的エージェントとして社会参与の力をもつと論じてきた。こうした申請者の組織研究は、工芸の制作過程で多様なエージェンシーが競合・融和するという A. ジェルの研究を発展させたもので、工芸研究と理論の源を同じくしている。よって、実業家の行為に複数の意図を抽出し、それらが一人の人間のなかでどう折りあいを付け、どんな工芸の制作や、その伝承、流通、さらに朝鮮表象へと結びついたかを論じるうえでは、申請者の過去の組織行動研究も応用可能だと期待できる。

また、工芸を含む物質文化研究では、制作の社会的背景の解明も重視されるようになり、近年特に制作知識の確かさを誰がどう保証しているかの研究が重要度を増している。

こうした学問的背景と研究成果の経緯から申請者は、植民地朝鮮における日本人の有力実業家の非営利的な工芸復興事業とその現代的影響を研究し、さらなる学術的寄与を目指すに至った。

2. 研究の目的

本研究の目的は、(1)マクロな動きとして論じられてきた伝統の創造を、工芸や制作というミクロなモノおよび行為と結びつける「結び目」を論じること、(2)植民地朝鮮に関する研究でも人類学的エージェンシー論でも後回しにされてきた多面的エージェントについて明らかにすることにある。当該分野における新たな段階の研究と位置づけられる。これまで言及こそされ研究の核心に置かれなかったマクロとミクロの直結点や、植民地における個人のエージェンシーの多面性を問題化する点で、本研究は当該分野で特

色と独創性を有する。

本研究は、[1]富田儀作という忘れられた重要人物とその活動を明らかにし、[2]高麗青磁の歴史のブラック・ボックスを開ける。これらは、時代の要請としての日韓関係の再検討に寄与するという社会的意義をもつ。また、[3]人類学的植民地研究とエージェンシー論の研究にとって第二段階の進展をもたらし、[4]工芸制作の知識の確かさを誰がどう保障してきたかの研究として物質文化研究にも意義深い成果をもたらすと期待できる。こうした分野への理論的貢献を、ほんらい研究が活発な欧米からではなく、東アジアの視座から供給する点でも、二重の学術的意義がある。

3. 研究の方法

歴史人類学の主たる方法である、史料調査と記憶の語りの収集に加え、物質文化論やアクターネットワーク理論の主たる方法である観察およびヒトモノの関係性のモデル化を用いた。

4. 研究成果

(1)実業家、物書き、名士などという人びとの活動が、(2)この時期に出現した近代メディア(雑誌、講演会、サロンなど)により、たがいに媒介されて広がりを見せ、(3)先行研究が着目してきたような他の植民地主義のエージェントとも相互に関連、作用して、全体的な植民地主義のエージェンシーを発揮していたことが明らかとなった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計6件)

太田心平、「民博の舞台裏で 展示にまつわる人びととその業務上の裁量」(査読有)、『民博通信』144: 2-7, 2014年。

太田心平、「写真のマテリアリティ 現代

韓国に残る植民地遺産を再考するための一試論」, 神奈川大学国際常民文化研究機構(編)『国際常民文化研究叢書3 東アジアの民具・物質文化からみた比較文化史』(査読無), 神奈川大学国際常民文化研究機構: 85-97, 2013年。

太田心平、「おわりに」, 朝倉敏夫・太田心平(編)『韓民族海外同胞の現住所 当事者と日本の研究者の声』(査読有), 学研文化社: 341-343, 2012年。[原文韓国語]

太田心平、「調査者がやってきた 視点の転換と知識の再帰性に関するメモ」, 朝倉敏夫・太田心平(編)『韓民族海外同胞の現住所 当事者と日本の研究者の声』(査読有), 学研文化社: 315-339, 2012年。[原文韓国語]

太田心平、「朝鮮半島」, 国立民族学博物館(編)『特別展 渋沢敬三記念事業 屋根裏部屋の博物館 ATTIC MUSEUM』(査読無), 国立民族学博物館, 2011年。

太田心平、「解題 『梅棹忠夫著作集 第11巻 知の技術』」, 特別展「ウメサオタダオ展」実行委員会(編)『梅棹忠夫 知的先覚者の軌跡』(査読無), 国立民族学博物館: 137, 2011年。

[学会発表](計2件)

太田心平、「消費されるガラス乾板写真 植民地朝鮮と現代韓国の一関係性」, 『人・モノ・情報の交換におけるダイナミズム 東アジアの物質文化からみた普遍性と独自性』, 神奈川大学, 2013/11/23。

S. C. OTA, "Identities and Regulation in Museum Backyards," International Workshop "Documentation and Recording of the Ethnographical Objects in the Museums," St. Petersburg: Russian Museum of Ethnography, 2013/09/25.

[図書](計2件)

太田心平、『両班文化の誕生 韓国の「真

「正な文化」と近代日本の知識社会』(査読無),
學研文化社, 2014年. (印刷中) [韓国語文]
朝倉敏夫・太田心平(編著)『韓民族海外同胞
の現住所 当事者と日本の研究者の声』
(査読有), 學研文化社, 2012年. (全344頁)
[韓国語文]

〔産業財産権〕
出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕
ホームページ等
「実業家・富田儀作の高麗青磁復興事業を事例とした植民地のエージェントの人類学的研究」
<http://www.minpaku.ac.jp/research/activity/project/other/kaken/22720337>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

太田 心平 (OTA SHIMPEI)
国立民族学博物館・民族社会研究部・准教授
研究者番号: 40469622